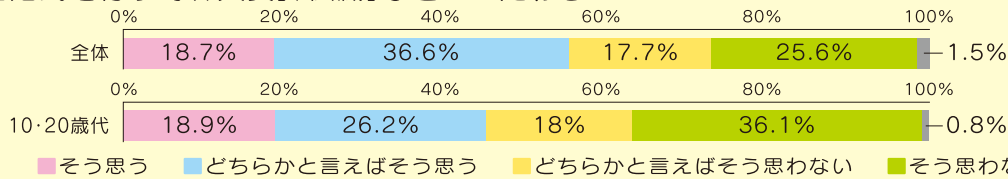


差別を生み出すもの① -昔から・・・、みんなが・・・-

日本には、古くからの言い伝えや考え方がありますが、あなたの考えにより近いのはどれですか

結婚式を行う時、「大安」「仏滅」などにこだわる



2020年度大分市「人権に関する市民意識調査」から

六曜

「祝い事」を行う時、「大安」などを選ぶ習慣があります。

2020(令和2)年度に実施した「人権に関する市民意識調査」において、『結婚式を行う時、「大安」「仏滅」などにこだわるか』との問いに、「そう思う」は18.7%であったのに対し、「そう思わない」は25.6%でした。また、10・20歳代の「そう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」と回答した人を見ると、全体より10.8ポイント高い54.1%であり、若い人ほどこだわらない傾向が強いことも分かりました。

六曜は、日の順番を表すものとして考えられたと言われており、旧暦の各月1日は固定されています。例えば旧暦の1月と7月の1日は先勝となっており、先勝の次からは、友引、先負、仏滅、大安、赤口、先勝・・・と、同じ順序で繰り返すようになっています。

この六曜は鎌倉末期から室町時代にかけて中国から伝わったとされていますが、もともと日の吉凶を示すものではありませんでした。当初、「仏

滅」は「空亡」と表現されており、ただ単に「よくない」という意味に過ぎず、現在の「仏滅」という表現とは似ても似つかないものだったといわれています。同様に「友引」についても文字の組み合わせから受けとる感じにとらわれ、本来もっていた意味が時代とともに変化してきました。明治時代に入ると新政府は、従来の太陰暦を太陽暦に変更するにあたり、日の吉兆を迷信として否定する方針を打ち出しました。しかし、このような禁止令にもかかわらず、暦に記入され続け、今日に至っています。一般的には仏教との関係もないとされ、科学的な根拠もありません。なお、現在の中国では全く使われていません。

丙午迷信

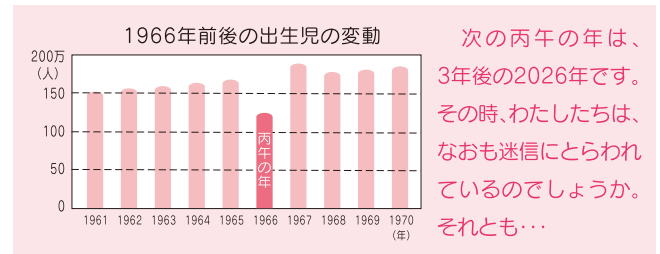
丙午は、干支の一つで、60年に一度回ってくる年です。「この年に生まれた女性は、男性を不幸にする」といううわさが江戸時代の中ごろから広がり、結婚できないことを苦にして自ら命を絶つ女性までいたそうです。

前回の丙午の年(1966(昭和41)年)の出生数を見ると、科学が進歩した近年でも、かなりの人がこだわって出産をひかえていることが下のグラフからもわかります。



※六曜の読み方は、「明鏡国語辞典第二版」(大修館書店)を参考にしています。

旧暦の
1月7月の1日は「先勝」
2月8月の1日は「友引」
3月9月の1日は「先負」
4月10月の1日は「仏滅」
5月11月の1日は「大安」
6月12月の1日は「赤口」
と決まっています。



わたしたちの身のまわりには、様々な慣習があります。多くは、幸福を願い、不幸を避けようとする意識に基づく自分を守ろうとする考えによって受け継がれてきたものです。この中には、「昔から・・・」「みんなが・・・」などの理由で、こだわったり、気になったりして、避けようとする心が生まれるものもあります。その心が差別を温存・助長したり、人権侵害(丙午生まれの女性との結婚を避ける、部落差別、仲間はずし、誹謗中傷など)へとつながっていったりする場合があるのです。

一人ひとりが、「昔から・・・」「みんなが・・・」という理由だけで判断するのではなく、その根拠などを絶えず吟味しながら、様々な人の行動を認めることが、人権尊重の社会をつくることにつながっていくのではないのでしょうか。